

# スペキュレーション

sum072

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

御幸世代にオリ主のエースがいたらという物語です。





## a c t 1

## 0 1

刺すような夏の日差しとは違い、包み込むような春の日差しを浴びながら青道高校野球部副部長の高島礼は時計を確認した。出迎える予定の少年と約束した時間は15分後。しかし、予想した通り、彼はこの時間に現れた。

「ご無沙汰しています、高島さん」

「入試以来ね、向井地くん」

世代No.1候補とも評されることがあり、メディア受けするルックスを持つ向井地慧をスカウトする高校は多く、彼自身も昨年までは青道以外に惹かれていただろう。しかしスカウトが本格化する時期に慧の父親が進学先に求める条件を出したことで、一部の競合が勝負を下りた。この機を逃さないと高島は自身の父をはじめとする理事を巻き込んで、早急に野球部にスカウトの条件を飲むことを認めさせた。ダメ押しにと慧がリトルで師事し、U-15でもバッテリーを組んでいた滝川・クリス・優が直筆で書いた手紙を練習見学の帰り際で渡して、今日という入寮の日を迎えたのだ。感慨もひとしおである。

「青道は野球留学も多いからか、寮も立派ですね」

「東京出身者でも通学時間の節約にと寮へ入る子も多いわ」

そうなんですかと柔和な笑みを浮かべて、相槌を打った慧は寮の入口で高島に頭を下げた。

「父が提示した条件のもとで野球をやれる環境を整えていただき、ありがとうございます」

「3年間、うんと活躍してもらおうことでWIN—WINよ」

「期待に応えられるよう、しっかりと研鑽を積みませ」

早生まれの慧は15になったばかりだというのに、受け答えに卒がない。メディア慣れしているというのもあるだろうが、父親の教育が行き届いているのだろうと感嘆した。次の生徒の出迎えがあると慧と別れて、高島は大きく深呼吸をする。同じイニシャルを持つ捕手との待ち合わせ時間まで後30分だった。

青心寮と大きく書かれた門をくぐり、慧はプレートを見ながら館内を歩く。新入生の部屋はどこという具体的な指示がなく、名前が書かれた部屋を探すようだ。館内の把握や他の入寮者との交流目的というよりは入寮者が多いために手が回らないという印象だった。やっと見つけた自身の名前の上には「滝川」とだけ記されている。ノックをすると聞きなれた声でどうぞと返ってきた。

「お久しぶりです、クリスマスさん。これからよろしく願います」

「ああ。お前が青道に来たなら、直筆で手紙を書いた甲斐があったな」

「にくい演出ですよね。父も感心していました」

各学年ずつ3人で1部屋だと聞いていましたけどと慧が疑問を提示すると3年の先輩は諸事情により4月で野球部を辞めることになったのだと答えられた。言葉に含まれる意味を正しく読み取り、広く使えるなら僥倖だと荷物を置けば、ミニ冷蔵庫から赤いコーラをクリスマスが差し出す。

「先輩からの置き土産のミニ冷蔵庫がさっそく役にたったな」

「ゼロじゃなく、赤を用意してくれるなんて。さすがに俺のことがわかっていますね」

「体質は変わっていないだろうから、次からは先発登板で勝った時だけだぞ」

「クリスマスさんと組めば、必ず飲めます」

勝気な笑みを浮かべた慧と、やれやれという表情を作ったクリスマスがコーラ缶を打ち付けあう。しばらく見えない間に身長も伸びたなどクリスマスはかつての相棒を見た。視線に気づいたのか慧が肩を竦める。

「すまないが、去年の成績は追っていないんだ。どうだったか？」

「シニアは全国ベスト4です。決勝のために温存されてたら、二番手が完投して負けました。U-15は監督が変わってバッテリーをセットで呼ぶ主義になったので、俺には

声がかからなかったです。1勝しかせずに負け越したので、来年からはいつも通り選ばれると思いますけど」

「良くない噂があるな」

「…噂は概ね事実です。ピッチャーになって、最初に組んだ相手がクリスさんだったからですよ。あなたがここで受けてくれるなら本気を出せますし、配球も指示に従います」

クリスはため息を飲み込んだ。中学進学を機に両親が離婚し、慧は祖父母がいる仙台に預けられた。彼を含む三兄弟の親権を得た父親がタイミンク悪く、長期で海外へ行くことになったからだ。中学以降の慧は二面性のある投手として知られている。シニアでは年上であっても捕手の指示に従わず、サインに首を振り続け、配球さえも自分で決める生意気な投手。U-15では首を振ることなく、素直にクリスの指示に従う投手。U-15を見ていると分かるのだが、普段のシニアでは露骨に投球で手を抜いている。捕手が取れるレベルに出力を調整しているとは本人談だが、その態度が一部では良く思われていない。これで負けていれば文句が出るだろうが、シニアの登板で負けることがほとんどないのが恐ろしいのだ。野球を始めて最初に組んだのが世代N01捕手だったのが悪く働いたのか、慧は無意識にクリス以外の捕手を下に見ている。

「御幸とは組んだことはあるか？」

「御幸？」

「相変わらず人の名前を覚ええないな。前に東京選抜の映像を見ただろう」

「成宮と組んでた、チャンス時しか打たない捕手」

「良い選手だ。スカウトを受けたと聞いているから、明日のテストで受けてもらうといい」

その覚え方はどうなんだという指摘を心の中でして、顎に手を当てて左上を見ながら考えるかつての相方を観察する。おそらく御幸のことを思い出そうとしているのだろう。

「プライド高そうなので、明日は8割で投げて様子をみます」

「慢心したり、相手を侮るな。1軍に上がりたければ、全力を出せ」

実力なら日本を代表するエースになれる可能性を秘めているのに、メンタルに問題がある。この場合はメンタルというより価値観なのかもしれない。手がかかるだろうし、その役割を暫くは自身が担うのだろうと今まで蓄積した大きなため息をクリスがつく。向井地慧の入寮日は本人にとっては穏やかに過ぎていった。

朝5時にジリジリと目覚ましの音が鳴る。緩慢な動作で起きた慧がまずは枕元のデジタル時計を止める。続いてスマートフォンを手にとつて、4桁の足し算と引き算を5問解く。朝の覚醒に時間がかかるために導入したアプリは計算問題に正解しないとアラームが鳴り続けるものだ。

「相変わらず朝は弱いのか」

「15分あれば起きれます」

「なら、その音を早く止めてくれ」

最後の問題を解き終えた慧をすでに支度を始めているクリスの視線が刺した。相手チームの監督に砂糖を固めたようなキャラメル顔だと言われる優男然とした慧の顔は寝起きなのと相まって甘さが増している。ただし身長は180を超えているし、長打も打てるバッターらしく体格も良いので首から下は全く甘くない。

「あと10分で支度を終えたら、グラウンドまで俺が案内するぞ」

「40秒で支度します」

「焦るな。初日だから格好にも気をつかえ」

きつちり10分後に支度を終えた慧が部屋を出ると同じような先輩と後輩の組み合わせの中で数名と目が合う。さつと視線を流して知った顔がないことを確認する。廊下にいる数名は慧たちを伺いながら、何かを話している。気にするなというように肩を叩いたクリスがグラウンドを案内する間に入部テストの説明をした。投手と捕手のテストの際はクリスも横に控えるらしいが、受けるのは1年生になるだろうという言葉で慧が露骨に顔をしかめる。

「例年、捕手候補は何名ぐらいですか？」

「1〜2名だな。今年は御幸が入ると噂になってたから他はいないかもな」

「例の御幸くん」

「俺と正捕手を争うなら御幸しかいないと思ってる。だから向井地、本気を出して投げろ」

その言葉を曖昧な笑みを浮かべた慧が流したことで、無言のままグラウンドに到着する。1年は向こうだと指示された列に並んで周囲を観察するも、件の御幸の姿がない。列に並んでいるのは15名程度。これから人数が増えることを考えても、人数は多いほうだろう。スカウトという名の特待生は3名だと聞いているから、他は一般入部。ここ数年、甲子園から遠ざかっているチームにしては人気が高い。

「ギリギリだけど間に合ったな。よお、久しぶりだな。中学は仙台にいたんだっけ？」

「ああ、御幸くん」

「話したことなかったから、覚えられていないと思つてたぜ」

「ここで知つている顔はクリスさんと君しかいないから」

集合時間の間際になつて隣に御幸が並ぶ。不思議と慧の両隣は空いており、そこへ滑り込んできたのだ。御幸は優等生だから呼び方も言葉もお上品でと思つているが、単に猫を被つていて、クリスに思い出させてもらつただけである。シニアの有名人が並ぶことで周囲の目も自然に集まる。二人には慣れたものであるが、興味本位の探る視線は肌に痛い。どこか落ち着きのない雰囲気の中、監督である片岡が太田と高島を伴つて現れる。まずは自己紹介をと指示が飛ぶ最中、猛スピードでグラウンドに飛び込んだ倉持という生徒の名前が一気に広まるというハプニングの後、残り2名となつた中で慧の番が回つてきた。

「青葉山シニア出身、向井地慧。ポジションは投手」

あいつ青道なのかなど周囲が騒ぎ立てるが、落ち着いた声音のまま言葉が続ける。

「このチームで一番勝てる投手でありたいです」

御幸は隣で口角を上げる。正直、青道の投手陣に層が薄いと感じていた。冬も近くなつてきたある日、高島から向井地慧をスカウトしてきたと聞いた瞬間に湧きあがったのは歓喜だ。あの成宮と肩を並べられる投手は同世代にほとんどいない。ただ向井地慧

は例外だ。世代No.1候補とも評されるセンスと体格。どれをとつても逸材。中身は色々言われているが、性格が悪いぐらいが好みである。下から青道を突き上げ、甲子園に行く。そのストーリーが描けた。自己紹介での宣言も嫌いじゃない。

「大江戸シニア出身、御幸一也。ポジションは捕手」

向井地慧を焚きつける一番の言葉を選ぶ。

「クリスさんからレギュラーを奪うつもりです」

二人の視線が交わる。秋には同じイニシャルをもじってKKコンビならぬ、MKコンビと呼ばれるようになるバッテリーのファーストコンタクトだった。

青道高校野球部の新入生の入部初日は体力テストから始まるのが伝統である。身体能力があるというのは、それだけでは上にいけないといえ大きなアドバンテージとなる。ただし朝練でのランニング、朝食という名の食事トレーニングの後で多くの新入生はすでに身体が重くなっていた。

「向井地くんは余裕そうだな」

「顔に出てないだけ。祖母が男だからって、あれぐらいご飯盛るから慣れていたのもあるけど」

くん付けなど柄ではないが、相手がくん付けをするのに倣っている。御幸としては距離を近づけて、なるべく早く敬称は外すつもりだし、外されるつもりだ。一方の慧は御幸のくん付けに案外、人との距離感を分かっているなど感心している。彼の家族とクリスしか知らないが、やや人見知りなので急に距離を詰められるとその後も苦手意識が残ってしまう。実は成宮が初対面で慧と肩を組んで下の名前を呼び捨てにし、好感度メーターが最低まで落ちていますが、捕手らしい観察眼で御幸は好感度をキープしている。

二人がスパイクを履いて、グラウンドに出ると氏名が書かれた紙を渡される。身体測定のように流れ作業でテストをこなし、マネージャーや先輩部員が新入部員の結果を記録していく。数字にすると目に見えてスカウト組、一般入試組の違いが出てくる。稀に一般入試組でも光るものがある部員もいるが、ごく僅かである。走力と瞬発力で目を見張る倉持洋一、卒がない平均点の高さを出す御幸一也と白洲健二郎、遠投力や柔軟性で規格外を見せつけた向井地慧、学年の中心になりそうな部員は自ずと頭角を現して行く。片岡の視線に高島は深く頷いた。

「ポジションに分かれて、テストを行う。投手と捕手はついてこい」

「……やつと本職ですな、向井地くん」

「嬉しそうだね、御幸くん」

御幸は飄々とした物言いをしているが、野心が隠せていない。やっぱりプライドが高そうだなと慧が内心呟き、周囲を見渡す。捕手候補は御幸を含めて2名、投手候補は3名。横並びになった5名の前に片岡が立つ。その横にはクリスが控えている。むずむずとした高揚感が足の裏側から背筋を通って、首筋まで到達する。慧は自然に笑みを浮かべていた。

「正直、同学年はどうでもいい。監督の目に止まって、早くクリスさんと組みたい」

「(どうせクリスさんに受けてもらうために一軍にあげたいか思っているだろう

な」

慧からの熱い視線と御幸からの流し目に加え、片岡からの一瞥まで受けたクリスは頬をかく。朝練からあえて距離を置いて観察していたが、今は御幸が上手いこと懐に飛び込んでいるという印象だ。お互いに本性を出し合ってからが肝であり、このテストが良い切欠になればいいと願う。本音を晒すと御幸は心配していない。案外、投手に尽くすマメなタイプであることは知っているからだ。問題は片岡にも伝えているが、慧の方である。本人が無自覚な問題を解決しなければならぬ。無自覚だから本人は動かないはずで、となれば片方が動くことを期待するしかない。御幸が知らないところでクリスの大きな期待がかけられている。人数が少ない捕手候補に投手を割り当てて、持ち球の全てを受けてもらうよう片岡が指示をする。もちろん慧は御幸側だ。周囲の心配や期待を余所に二人は球種の打合せをしているのか話し合っている。

「おっ、サイドスローがいる」

「ふーん。丁寧に下に集めているな」

「優しい評価だけど、本音は？ 向井地くん」

「……他の奴なんか気にしても意味はない」

気が合いそうだとほくそ笑む御幸に対して、この返しで笑うかと慧は眉を顰める。選抜での遠征経験もあり、そこで成宮と組むだけあって御幸が捕手として優秀だというこ

とは慧にも分かる。同じシニアチームで自身の球を受けていた捕手とは比べ物にならないだろう。未だ御幸の捕手としてのレベルを測りかねているからこそ思案する。どれぐらいの本気で投げべきかと。黙って考え込む慧を御幸はじつと見つめている。

「次、向井地」

「はい」

何度かキャッチボールをして肩をつくる。それから、慧は大きく深呼吸をして酸素を肺に入れる。マウンドに立って、その先にいる御幸を見据えた。最初に指示されたのはストレートを5球。マウンドの慧は静かだ。調子が上がると闘志をむき出しにして吠える投手もいる中、向井地慧は逆に口数が少なくなる。じつとバッターを見下ろして、甘いといわれるたれ目がちな瞳が冷える。

「向井地、いきます」

穏やかに宣言をする。ど真ん中にミットを構えた御幸は唾を飲み込んだ。映像は何度も見てきたが、球は一度も受けていない。しかし特徴は頭に叩き込んでいる。180半ばの長身から放たれるノビとキレがある球速140 km超のストレート、回転数があるから打者だと更に早く感じる一級品とされる向井地慧の投球。

スリークォーター気味のフォームから白球がリリースされた。来たと認識するより早く、ミットへと収まったボールからの重い衝撃が御幸の身体を突き抜ける。さすがの

一言だった。何より素晴らしいのは制球だ。それからの4球をインハイ、アウトロー、そこからボール一個分の出し入れ、全て構えたところに寸分の狂いもなく投げ込んできた。加えてスローやドロップなど数種類のカーブ、縦と横に変化するスライダーを変化球として持っている。軽く投げているようにみえる変化球の制球もストリート同様に決まっていく。傍らで見学していた太田が満足そうな表情を浮かべる中、クリスの表情は冴えない。それに気づいた片岡が声を張り上げようと腹に力を入れた瞬間、御幸が徐々に口を開く。

「次はU—15のアメリカ戦で4番に投げたストリートが欲しい」

「嫌だね。球速は出るけど、コントロールは甘いし、クリスさんしか取れないし」

「俺は捕る」

「ふーん。……御幸くんってストライクゾーンの球を捕逸した時ってどっちの責任だと感じる？」

「捕手。投手を活かすのが仕事だから」

その答えを貰ったのは慧の人生で二度目だった。ニヤリと獲物を狩る肉食獣のように目を細めてから指を3つ立てた。御幸が頷き、持っていた球を返す。これこそ待ち望んでいた切欠だとクリスはこみ上げたものを噛み締めた。片岡も吸い込んだ息を大きく吐いた。今年の新入生は癖がありそうだとサングラスの奥からマウンドを観察する。

新しい風がうなりを上げるのを確かに感じていた。指導者として彼らの勝手な行動を咎めるのは勝負が終わった後にすることにした。

朝練のほぼ遅刻によるペナルティで命じられたグラウンド20周のランニングをしながら、なぜ向井地慧と御幸一也も罰則を受けることになったのか事の顛末を聞いた倉持洋一が抱いた感想はコイツ等も同じガキなんだなというものだ。初日早々、二軍行きが決まったことで話題を浚った有名人たちが練習終わりに走っていることで怪訝な目を向けてくる者も多い。グラウンドを妙な空気にしたのは癪だが、話の面白さで倉持的には相殺している。

「で、捕れたのか？」

「おう。それはもう、バッチリと」

「2球目まで後逸して、3球目でやっと捕った」

御幸はドヤ顔で、慧は表情を変えずに結果を報告した。温度差がエグなどは思ったが、懸命にも口に出さないでいる。曰く、体感160km、実際スピードガンで測っていないが152〜5kmは出ていたストレートだという。球威がすさまじいが、他の持ち球と違って真ん中、外角、内角の高め、低めでしかコントロールできないのが投手としてプライドに触るらしい。これには片岡も満足気に頷き、二軍を宣言した。ここまでは

良い話。しかし勝手な行動でテストを無視したとランニングのペナルティが次に命じられた。最後にオチまでつけるとは、やるやんという感想はクリスから報告を受けた主将の東のものだが、当事者たちは知らない。

「あのさ、今聞くことじゃないけど、名前なに？」

「今更かよ！　倉持、倉持洋一だ。テメエらとは違つてボーイズリーグ出身」

「ジエームズ・ポンドみたいな名乗り方」

「向井地の感想、ズレてるな」

さり気なく敬称を外されたが、慧は気にしていない。3球勝負の土壇場とはいえ、例の球を捕つたことで御幸は信頼に値する捕手だと思つているからだ。加えて、くえない性格とも感じている。倉持くと慧が呼ぶと鳥肌が立つから止めろと本人が拒否したので、半強制的に呼び捨てになつた。見た目から猪突猛進型だと思われがちだが、倉持は気遣いの男である。先ほどから御幸が話し、慧が補足し、倉持は専ら聞き役に徹していることから明らかだ。本来はもつと荒々しい口調だが、初対面だから気をつけているのが慧に対して明確に功を奏していた。ただ、時折本来の口調が漏れ出ているので、性格を察することができる。そういった裏表のなさが好感触だったのも作用している。ペナルティを終えてから片岡の元へ行き、改めて今日のことを謝罪する。流れで一緒に行動していたが、寮の前で別れようとしたときに不意に倉持が疑問を投げた。

「俺は最終的に青道からしかスカウトがなかったけど、お前らは違うだろ？　なんでここを選んだ？」

「礼ちゃんが3年前から熱心にスカウトしてくれたからかな」

「……全ての条件に合う学校が青道だった」

倉持は二人の表情を監察する。御幸は口角は上げていたが、目が笑っていない。慧は顔を見せたくないのか、遠くを見ている。互いに大事なことを言っていないのは分かっていたが、不文律での不可侵条約が結ばれた。太陽が沈み、星が顔を出しかけた空の下、温い風が三人の間を通り抜ける。そうかと話題を切り出した倉持が終わりとはばかりにパンと手を叩いた。じゃあなと手を振って自身の部屋へと入っていく倉持を見送り、慧と御幸が残された。辺りは不気味な程しんとしている。

「御幸くんさあ」

「呼び捨てでいい」

「そう。御幸、勝つことは好き？」

「勝つことには貪欲でありたいと思っている」

「いいね。俺は勝つことが全てじゃないけど、勝つことで証明できるものがあると思う」  
それで証明したいものがあると付け加えた。御幸は続きを促すように視線を投げる。慧はふわりと笑った。かつて所属していた大江戸シニアの監督が称した醤油でも塩で

もない、砂糖を固めたようなキャラメル顔だという言葉が頭をよぎった。この顔がマウンド上では冷え冷えとバッターを見下すのだ。その落差に戸惑う相手も多かつたとシニアの大会を思い出す。マウンドで投手は王だ。そういう意味では成宮鳴のような横柄さも、本郷正宗のような威圧も、向井地慧にはない。凜とした佇まいで淡々と相手より自分が上だと切つて捨てるを繰り返す。容赦のなさでいえば一番だと御幸は思っていた。

「そのうちバッテリーも組むだろうから先に言っておくけど、サインに首振るから」  
「知ってる。シニアの試合で何度も見ている」

「早くあのストレートを100%捕れるようになってほしい」

「コントロールも磨けよ」

「それは当然。でもクリスさんは今でも全部、捕れる」

「……ほー。こつちからも言うけど、小器用な感じでまとまって満足するなよ」

「へえ、言うね。ちなみにチェンジアップは8割から調整中。あと試してからだけど、スライダーで決め球をつくる予定」

「それはテストの時に言え！ 明日、チェンジアップとそのスライダーを受けるからな」  
慧は御幸がクリスを意識していることに気づいて煽り、それを受けて御幸は慧が器用で平均点が高いからNo.1候補止まりなことを暗に指摘した。やっぱりこいつ、一

筋縄ではいかないと両者共に心の中で叫ぶ。ふっと息を吐いた慧が御幸に手を差し出す。

「向井地慧。ポジションは投手。右投げ左打ち。スイッチヒッターにも興味がある。身長184cmだけど、たぶんあと10cmぐらいは伸びる。これからよろしく」

「……御幸一也。ポジションは捕手。お前と同じ、右投げ左打ち。身長は去年の175cmから測っていないけど、伸びてる。どうも、よろしく」

ギチギチと音が鳴りそうなぐらいに固く握手を交わした。手に触れた瞬間に双方、相応な練習を積み重ねていることが分かったのか手を緩める。戻らない同室者をクリスが部屋で心配している中、後輩たちは彼の思った以上に歩み寄っていた。慧を探しに出たクリスが二人の様子に笑みを浮かべるのは5分後のことだった。

それは後のMKコンビが二軍へ上がって間もない、新しいクラスで一緒に行動する団体が固まりだした頃のことだった。御幸や倉持とクラスが分かれた慧は部活以外の時間を大体、一人で行動している。同じクラスに野球部もいるらしいが、顔と名前を一致させるのが苦手ということを免罪符に積極的に覚える気がない。況やクラスメイトの名前も曖昧である。本質的に他人に興味がないのが災いしているが、顔の良さを利用し、凡そのことを笑って誤魔化している。現時点で慧が名前を憶えているのは東、クリス、御幸、倉持、加えて二軍マウンドで一緒になった丹波と宮内のみ。対して、部内でセツト扱いされている隣のクラスの御幸は慧と同様に交流範囲は狭いもの、練習試合の映像をみて青道を研究していたことや参謀役の捕手だけあつて一軍メンバーの顔と名前、同学年の部員、クラスメイトの名前ぐらいは一致させている。ただし、彼もクラスではポツチ行動が基本のため、他人からみた印象は似たものだ。その二人が休み時間に廊下で顔を突き合わせて話している。彼らのクラスメイト達は二人の繋がりに首を傾げた後、野球部かと納得して友人たちとの会話に戻っていった。

「部活以外で話しかけるなんて珍しい。どうしたの？」

「さつき礼ちゃんから聞いたけど、土曜に二軍と一軍で試合をするらしい」

「御幸の情報源ってセコイよね」

「情報は鮮度と確度が大事だろ。あのな、重要なのは試合があることじゃない。現一軍メンバーは春の大会の結果がアレで監督の中では白紙になって、この試合で一軍メンバーを改めて決める予定なんだと」

「なら先発は丹波さん。御幸はスタメンの可能性があるかもしれないけど、俺は良くてリリース。あるいは様子見のクローザー」

その言葉にニタニタと笑みを浮かべた御幸が指を振った。気雑たらしい仕草に慧が引いているが、そんなのお構いなしに言葉を続ける。

「たぶん先発はお前だと。礼ちゃんが監督に推してくれたらしいから、お礼言っとけよ」  
「高島さんに袖の下とか使ってるの？」

熱い風評被害があつたが、御幸はそれを否定した。投手層が薄いし、丹波さんは前の練習試合で投げているから、新戦力を使ってみましようという流れだったらしい。ほおと息を漏らした慧が目を細めて笑みを浮かべる。打者一巡はさせるだろうから最低でも3回までは投げれるなど言つた慧を見た御幸はポカンと口を開けた。コイツ、一軍相手に三者凡退を想定しているのかと思つたが、OBへのデビュー戦としてはインパクトあるだろうと頭を切り替えるので、同じ穴の貉である。実は片岡としては、このシニア

のエリート組を春の大会準々決勝の中堅校相手にデビューさせようと考えていた。しかしベスト16の試合で投手が炎上して二桁の大量得点を許し、打線も珍しく湿気って一桁しか返せないと前評判を覆すまさかの敗退となったため、その計画は眼前に消えたのだった。あえて、そのような背景があることを隠して高島は御幸に情報を渡したのだが、一年後には大人の思惑にも気づくほど狡猾になる二人も中学あがり時点では、まだそれに気づくことはない。

「チェンジアップは一軍相手にも使える。配球を話し合いたい」

「どうせ一軍バッターのデータや映像は持っているでしょ？ お昼にどっかで見たいなー、御幸くん」

「俺のことをよくお分かりで、向井地くん。DVDが見れる教室の鍵も礼ちゃんから拝借済ですよ」

大人の掌で踊っていることを知らない二人は準備が良いことだと笑い合う。その姿を見た一部の女子が騒いでいるが、実際は越後屋と代官の雰囲気である。知らぬが仏とはこのことだと慧と同じクラスである白洲健二郎は廊下側の自分の席で頬杖をつきながら、その様子を眺めていた。白洲の席に遊びに来ていた川上憲史はあいつ等、心臓に毛が生えているだろと零している。白洲はチラリと横目で川上を窺う。当事者以上に青くなった人の好きは友人としては良いが、投手としてみると同学年に規格外がいるか

「こそ悪い方向に作用してほしくないと願う。チャイムがなり、それぞれが教室へと向かう中で白洲と慧の目が合った。きよとんとした顔に白洲は俺が野球部だつてこと知らないなど確信した。彼は自身の体力テストの結果を正しく理解している。走攻守でいうと走は先輩にも引けを取らない。スタミナとパワーをつけて、バッティングと守備を伸ばせば二軍に行けるだろうと考えていた。二軍に上がった時にまた自己紹介するかと白洲は同学年のエース候補の背中に静かに誓う。」

1年生バッテリーが廊下で話し合っている一方、彼ら上の階にある2年生教室でクリスの席を結城哲也が訪ねていた。やはり、この件で最初に自分を訪ねるのは彼だったかとクリスは予想が当たったことに笑みを浮かべる。どうしたと白々しく声をかけたところ、結城は静かに問う。

「向井地慧はどういう投手だ？」

「丹波から聞いているんじゃないのか？」

「お前の視点からの意見が聞きたい」

「総合的に良い投手だ。コントロールは現時点でも部内トップだろう。ストレートが一級品なのは間違いないが、カーブもスライダーも数種類を投げ分けるぐらいに変化球の開発にも熱心だし、全球種の質が平均的に高い。本人の申告通り、球速より球質を重視

しているのがよく出てると思う」

「ふむ」

「ただ制球にかなりの集中力を使う。それが些細なきっかけで切れるのが難点だったな。切れた後は感覚を戻すのに3〜5球ぐらいボールが甘くなる。ただ、悪い時でも、それなりに強打者をさばけるぐらいには頭も働く」

最後に受けたのはU—15の遠征時だから2年も前になるがなと付け足したクリスは情報に領いた結城は礼を言うと言とうと教室を出て行った。燃える同級生を見送ったクリスは自身の席に深く腰掛けて、目を瞑った。瞼の裏に思い浮かべるのは入部初日に慧と御幸が行った3球勝負。あれこそが本気の投球であり、手を抜いているシニアの映像は役に立たないだろう。U—15で組んだのも2年前だ。打者として慧と対戦することも、御幸とバッテリーを組んでどんな配球をしかけてくるかも楽しみである。ふつと息を吐いた後に目を開ける。野球用に使っているノートを開いて、新しいページにシャープペンシルを走らせる。シニアではHRを打つほどの打撃力がある後輩二人を思い浮かべた。捕手として彼らを打ち取る配球を考えるのも楽しい時間になった。

青道高校野球部OBの悲願は甲子園での優勝。ただ、ここ数年の母校は大会でよいところまでいくものの出場すら遠ざかっている。原因は明確、投手不足の一言。青道は打撃力のあるチームとして名を馳せている。裏を返せば点を取らなければ、勝てないチームともいう。投手候補は毎年、数名が入ってくるも野手へのコンバートや実力不足により絶対的エースが不在。継投でしのいで、爆発的に点を取るのが青道スタイル。なので取った、取られたの2桁得点は当たり前。コーチ役のOBが高島にスカウトの状況を確認するも、去年も今年も世代N01捕手らしい。肝心の投手がたとえ落ちしていた中、彗星のごとく現れたのが向井地慧だった。リトルで全国制覇、国際大会への出場、拠点を移したシニアでも地方大会3連覇、全国大会上位常連、U-15に選抜される世代N01候補のエリート投手。そのルーキーが一軍相手に登板だと情報がまわれば、色めきだつた者たちが集まるのを止めるものはない。東が去年の西東京大会の応援より来てるんちゃうんと呆れるぐらいにOBや記者で埋まったスタンドの鼻息は荒い。

「で、注目のルーキーは初回を3奪三振！ 今のお気持ちは？」

「別に。それより4番の東さん、5番のクリスさん、6番の結城さん、次の回が肝になる」

「クールだな。まあ、話題性はこれで十分。次の回はチェンジアップも使って緩急つけていこう」

「……クリスさんから三振をとりたいな」

「難しいけど、俺とお前でやろう」

出来ると言えなかつた御幸に慧の問うような視線が刺つた。逃れるかのように御幸はマネージャーからドリンクを受け取る。バッターボックスでは小湊亮介が一軍先発の3年投手から四球を見極め、一塁へ。続く伊佐敷純がバットを構えているところだった。二軍の映像を見ていた慧が味方でよかつたと零していた二人である。曰く、小湊はギリギリを攻めて投げた球を見極めた風で四球にされるとイライラして制球が乱れそう、伊佐敷のような悪球打ちは想定通りにバットを振らないので困惑するとのことだ。確かに捕手としても敵にはしたくない相手である。ちなみに今日の打順は御幸が8番、慧が9番とひとまず定石通りに置かれているので、余程のことがない限り初回で打席は回つてこないはずだ。片岡から試合前日、デビュー組に伝えられた条件は二つずつ。慧は最大5回までの登板であること、100球を超えたら5回より前でも降板、御幸はスタメンでフル出場、5回までを慧、6回以降を丹波と想定してリードをすること。初回に慧が投げたボールは11球。1回あたり使える球は平均20球、カウントをとるためのボール球は控えるか、2巡目からは打たせてアウトを取る方向で球数を減らしていく

のもありかもしれないと御幸は思考を巡らせる。試合は伊佐敷がワンバンすれすれのボールをヒットにしていた。

「多分、クリスさんは俺の集中力を切るために打席途中でタイムを取るはず」

「ん？ ああ、前に言ってた弱みの」

「直後の1球が勝負の分かれ目だと思う。いつもなら1球分ぐらい高めに浮くけど、今日は絶対に集中力を切らさない」

「自己暗示の類か？」

「御幸、俺とお前で次の回も三者凡退、連続三振記録を伸ばす。今日で俺たちは一軍に上がる」

伊佐敷の次の打者がダブルプレーにとられ、続く打者も三振と二軍初回の攻撃は無失点で終了した。立ち上がった慧が御幸を見下ろした。俺はやるけど、お前はやる気あるかと問う甘い双眸の冷えた視線が御幸に向けられる。やっぱり慧の容赦のなさは同世代でもずば抜けている。才能の上に胡坐をかかずに容赦なくストイックで上を目指し続ける求道者。それについてこれる者を無意識に選んでいる。今まで彼の選抜を経て、信頼を得たのはクリスのみだった。そして今、自身がその岐路に立っている。御幸は立ち上がった慧の胸をクラブで叩いた。やるぞと添えて。

マウンド上の慧は相変わらず静かに佇んで、18.44メートル先の御幸を見据えていた。グラウンドの熱量は最高潮に達している。バッターボックスに入る打者を見た御幸がニヤリと笑う。何かを囁きかけた御幸をけん制するようにクリスから口火を切る。

「ストレート、チェンジアップ、スライダーで3球勝負。東さんも三振とは感心したぞ」「クリスさんも三振にとるつもりです」

初球のストレートはカットして、ファウル、続くスローカーブは空振り、スライダーもファウル。ここでクリスはタイムをとる。バッターボックスから外れて慧へと視線を移すと、目が合った。甘い瞳が感情を映さず凜いで、何も読み取れない。味方だと良いと思えた点も、敵になると厄介である。だが集中力が切れれば、ボールは必ず高めに浮く。決め球はおそらく、初日に御幸が要求した例のストレート。このバッテリーがクリスを相手取るなら、それを選ぶはずだという確信がある。そしてボールカウントをとることはしない。次の球が勝負だと勘が告げている。打席へと戻って、ゆつくりとバットを構えた。

「(かかってこい)」

「(ど真ん中に例のストレート。クリスさんに甘く入ったら、飛ばされる。絶対に浮かせるな)」

「(いける！ 全力で投げるから、後逸するなよ)」

三者の思惑が交わる中で慧が腕を上げる、脚を上げて、スリークオーターのフォームから球が放たれる。腕の振りで音が鳴りそうな程だったと、スタンドで見ていた倉持は後に語った。きたとクリスは奥歯を噛み締める。最後に受けた時よりも球威も球速も上がっている。だが、軌道は変わらない。だからこそ打てる。狙いを定めて、バットを振る。しかし、思った感触が手にこない。そう認識すると同時にミットに球が収まるズバンという轟音が流れ込む。球審の片岡がストライクとアウトを宣言する。

「浮かなかったのか」

「絶対に集中力を切らさないって言ってました」

「今日が特別だろう。扱い方は心得ているから分かる」

短く会話をした後、バッターボックスを去る。視界に入ったネクストサークルで燃えるオーラが隠しきれない結城の肩を叩く。深く頷いた結城がバッターボックスへと向かった。理由は説明できないが、クリスはこのルーキーたちから初ヒットを打つのは結城じゃないかと思えた。方や幼少期から才覚を発揮、入部後は数段飛ばしで駆け上がる者。方や入部直後は期待がかけられずも、黙々と努力を重ねて才能を開花させた者。案外、あいつらは俺たちの代と相性が良いのではと思いついたクリスは緩みそうになった表情を引き締めて、ベンチへと歩みを進める。カキンという音がグラウンドに響

いて、クリスは振り返った。初球から打ちにいった結城が外野の絶妙な位置にボールを落として、一塁で留まる。ベンチから東がよくやったと大声で結城を称えていた。マウンド上の慧の瞳は冷え続けているものの、口元が弧を描いていたのをクリスは見逃さなかった。

慧は御幸が手にするスコアブックをのぞき込む。マネージャーが書いたのか女子らしい文字が並ぶスコアには今日の試合がまとめられていた。資料用にOBが撮っていた映像を顔見せがてらに取ってきた慧はDVDケースを指で叩いて、こちらに気づかない野球馬鹿にアピールをする。はっとした御幸が顔を上げて、悪いと右手を縦にして首を竦めた。こちらがOBたちの短くはない話に付き合っている間に悠々としやがってと口には出さないが、目が物語っている。

「丹波さんは？　ちゃんと声かけた？」

「かけたよ。今日の結果は自分で振り返りたいから遠慮するってさ」

「それならいいけど」

「OBからなんか言われたか？」

「早く完投できるようになってくれだつて。御幸くんは塁上にランナーがいない時も打ってほしいだよ」

投手としては5回を被安打2、無四球、12奪三振、無失点。打者としても2打席2安打。しかもツーベースとHRという本日のMVPに相応しい活躍をして一軍昇格を

決めた期待のルーキーは怪訝な表情を崩さないまま床に腰を下ろした。一方、一軍相手にトータル2桁未満の9失点で抑え、HRを含む5打席2安打とこちらも一軍昇格となった新参捕手は、その視線を受け流す。仕切り直すように慧がポータブルDVDプレイヤーで映像を流す。まずは試合を通して見て、次に映像を止めながら振り返るという流れは御幸が提案した。試合は6回に差し掛かる。慧から丹波へと投手が変わると、試合の様子は一変した。丹波の調子は悪くなかったが、高めに浮いたストレートを狙われて6回だけで3失点。続く7回、8回は得点圏にランナーを出すも御幸が盗塁を阻止するなどして1失点ずつで切り抜けるも、最終回では決め球のカーブも打たれて4失点。二軍の攻撃は1年生バッテリーの連続HRで3点を奪うも、打線が繋がらずに追加点はなし。過去の一軍対二軍の試合で一番点差の少ない展開となったため、ちゃんとした投手がいれば攻撃力が一つ下でも戦えるというのを証明した形となった。

「5回の東さんのレフトフライはストレートの球威で何とか押し切ったけど、危なかった」

「あれは打たせてとるより、三振がよかったな。スライダーで空振りが妥当か」

「終盤は変化球のキレが少し落ちてたし、スライダーならもつと飛ばされてた気がする。今みたいにセンターならいいけど、ライトかレフトなら捕り逃して長打コース」

「やっぱ自覚してたから首振ったのか。……ちなみに今日、完投って言われてたらやつ

てたか？」

「やれと言われても拒否する。怪我のリスクは最小限に抑えたい」

シニアの試合は7イニングまでしか行わない。慧も御幸も今までの試合でフル出場してもそこが壁だった。しかも慧のチームはエースを故障させないために二番手、三番手も積極的に起用し、継投も多用する監督だったこともあり、周囲と比べて登板が多い投手である。従ってあまり多くの球数を投げたことがないからこそ、体力配分が下手なのが今日の試合での明らかになった。マウンドを降りた後はベンチでぐったりして、マネージャーを心配させていた。本人曰く、集中力を切らさない緊張が一気に抜けたかららしいが、誰も信じていない。正直、御幸も初めての9イニングの試合で心身ともに疲れが出ており、風呂でウトウトしたほどである。片岡が1年ルーキーズの体力底上げのために特別メニューを作っているとは知らない本人たちはため息をつく。その後もあれこれと反省や感想を言い合うも、最終的にクリスのリードはココがすごいを語り合った二人は満足気に頷き合う。すると突然、部屋にノックが響く。ここはクリスと慧の部屋で、クリスは今日登板した一軍投手と話があると席を外している。ノックをするならクリス以外の来客となる。少し面倒くさそうに立ち上がった慧がドアを開けると、そこには主将の東が立っていた。御幸もいるならちようどエエわ、邪魔するでと足を踏み入れると、すかさず御幸が抱えていたクッションを東側へと差し出した。

「そんな緊張せんでも。とりあえず、今日はお疲れさん。あと一軍昇格、おめでとうな。これからよろしゅう」

「ありがとうございます」

「さつき監督と話して仮やけど、背番号が決まったから伝えにきたんや」

「ご足労をおかけして、すみません」

「向井地は固いなあ。背番号は向井地が11で御幸が12な。夏の大会前にもう一度調整するで」

「えっ、二番手ですか」

一瞬だけ驚いた後に口元が緩んだ御幸とは違い、慧は平然としていた。東も片岡から告げられて聞き返してしまった程だったが、こう受け止められると可愛げがないと心の中で毒ついてしまう。断じて今日の試合で慧と御幸から一つもヒットが打てなかったからではない。さて二人は東に聞こえるか聞こえないかぐらいの音量でエースが誰か予想している。推測通り今日の試合で一軍として先発登板した3年投手がエースナンバーを背負う予定だが、東は正解を教えない。

東の学年は全国各地からシニアの上位選手を集めた期待が高い世代だった。しかし入学して半年、片岡などの首脳陣や東は気づいた。この学年は伸びしろが少ない。結果として東のみが頭一つ抜け、他は強豪校として合格ライン上の選手が並ぶ。それとは逆

に一つ下の学年は期待が低かったが、それを覆した。結城を始めとする複数名が地道な努力を重ねて、才能を開花させつつある。何よりも同期の繋がりが強く、ここ数年で一番チームワークがよい。その次、この学年はどうだろうと胡坐の上に頼杖をついて東は二人を見据える。同期の中で頭一つどころか、二つ、三つほど抜けている才能の持ち主であるから、彼らもその周囲も苦労するだろう。幸運だったのは同じレベルの才能を持ったのが二人だったことだ。一人なら最悪、孤立してしまう可能性もある。主将としては彼らの理解者になりうる者を鍛えなければと道すがら逡巡していたことを反芻して、ゆつくりと口を開いた。

「まずは結果で語れ。ええな」

「勿論そのつもりです」

「期待に応えてみせますよ」

後輩としては頼もしいが、一筋縄ではいかなさそうな気難しさも感じる。東にとつては今年が甲子園への挑戦権があるラストイヤーであり、主将としてOBたちから受け継いだ想いもある。そんな話をしようと思っていたが、口から出たのは違う言葉だった。今、彼らは上だけを見ている。背番号を貰うとか、レギュラーになるとかではなく、自身がやる野球を求道し、その過程で勝ちがあると考えている。青いし、エゴが強い。でも、まだそれで良い。自分たちが抱えているものを背負わせるのは先が良いと直感がは

たらいだ。大きく息を吐いた東が横を見ると小さな画面に今日の自分の打席が映っている。6回も投げていたら、どんな配給で俺に挑むかと東が問えば二人は顔を合わせて相談し始めた。三人になった反省会はクリスが戻ってくるまで熱く続いたのだった。